

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

《人社系》

●東京外国語大学総合国際学研究科国際協力専攻

「平和構築・紛争予防修士英語プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

PCS 講座では「現場」を重視する方針であることから修士論文執筆にあたりフィールドリサーチもしくはインターンシップを奨励しており、その渡航費補助を行った。修士論文執筆スケジュールを考慮すると本来であれば、第一年次修了後の春休みに現地で行うことが好ましいのだが、会計年度をまたぐ案件での補助ができないため、否応なく夏休みでの実施が多くなってしまった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

上記にも記したとおり、「会計年度をまたぐ案件」の実施が不可能であることが一番の要因である。そのため夏休みを中心にフィールドリサーチ等を行うことになるのだが、国によっては長期休暇で十分なインタビューが実施できない等の理由により長期間の滞在が余儀なくされる、もしくは多少授業と重なる時期にリサーチを行う必要性が生じることもある。修士論文の提出が翌年1月初旬であることを考えると学生にはかなり過酷な執筆スケジュールを強いることになる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

かなり遅い時期でのリサーチ実施となるため、出発前には指導教員からの十分な指導、現地滞在時であっても電子メールやスカイプ等を通じ連絡を密にし、必要な調査を滞りなく実施できるよう配慮し、さらに帰国後には、指導教員のみならず必修のセミナーⅣを通じて統計処理や方法論などでも同様に指導を仰ぎ、論文を完成させるよう配慮した。